

## 堂々と胸を張って

令和6年1月9日 浅賀

おはようございます。あけましておめでとうございます。

すがすがしい新年を迎えたことと思います。令和6年が諸君にとって素晴らしい1年になるよう、諸君の奮闘を期待します。

一方で、元日から能登半島を中心に大地震が発生しました。犠牲になられた方のご冥福をお祈りするとともに、被災された方へ心からのお見舞いを申し上げます。この地震による復興は、3.11よりずっと息の長いものになると思われまふ。今は連日報道されていますが、報道が少なくなっても、私たちは根気よく支援を続けなくてはなりません。

さて、次の引用から話を起こします。

「あらあら、お帽子を直してあげましょうね」

娘をおぶっていた私の後ろで声がした。同時に、中年女性が駆け寄ってきて、あっというまに目深にかぶっていた娘の帽子を上にあげた。

次の瞬間に起こるであろう光景で、私の頭の中は真っ白になった。おそらく彼女は狼狽し、自分のお世っかいを悔やみながら足早に立ち去ろうとするだろう。そんな未来を想像していた。

「まあ、かわいいこと。なんてお名前なの？」

彼女から発せられた思いもよらない言葉に、私はおどろいた。

「愛子です」

思わず答えた私に、彼女は微笑みながら、こう言った。

「お帽子でおめめがよく見えないみたいだったわよ。お母さん、愛子ちゃんのために、堂々として！」

狼狽してしまったのは目の前の女性ではなく、私のほうだった。

愛子はダウン症。愛子を連れていくスーパーでは、いつも他人の目が気になって、私はおどおどしていた。

なるべく愛子の顔に気づかれないように、故意に帽子を深くかぶらせていたのだ。障害児を産んでしまった自分を恥じていたし、世間にも負い目を感じていた。そんな私の心の中を見透かしたかのような女性の発言。彼女は、こう続けた。

「お母さん、堂々と胸を張って！愛子ちゃんのために」

そう言うと、笑顔のままスーパーから出て行った。私は、雷に打たれたかのような衝撃を覚えた。

そうだ！今このときから卑屈になるのはやめよう。私が卑屈になれば愛子も卑屈になってしまう。堂々と胸を張って、生きるのだ。私の中で、何かがはじけた。

スーパーを出ると、西の空が茜色に染まっていた。私は、その夕焼けに、美しいあと見入ってしまった。つい先日も、空は同じような色をしていたけれど、私は夕焼けを、血を流したような色だと思ってしまったのだった。愛子が生まれて、十一月。忘れられない母子再生の日だった。

藤田ゆかり「堂々と胸を張って」(『PHP 2022年5月号通算888号』所収) PHP研究所

私は35年前、教員として初めて勤めたのが養護学校、今の特別支援学校でした。何の予備知識も心構えもない大学新卒の世間知らずが、現場に飛び込んだのです。先輩の先生方に手取り足取り教えてもらい、保護者の皆様にハッパをかけられて勤めました。慈愛に満ちた世界でした。命とは何か、生きるとはどういうことかといった、根源的かつ哲学的な問いかけを絶えず突き付けられた学校、多くを学んだ忘れられない学校です。

私はこの経験から、多様性(ダイバーシティ)や共生社会について、もっと関心を持ち考えてもらいたいという使命感があるのですが、今日諸君と考えたいのは、このこととは別で、私たちを取り巻く世間とどう折り合いをつけるか、についてです。愛子ちゃんが十一月の時に、スーパーで中年女性に出会ったことをきっかけに、お母さんは世間と折り合いをつけられました。もしこの出会いがなかったら、どうだったでしょう。

特別支援学校のお母さん方は、子どもが小学部に入学して、少しずつ強く逞しくなっています。どの親もそういうものですが、障害のある子を持つ母は、「大きくなったねえ」とか「将来が楽しみね」とか「ランド

セルを用意した？」という、近所や親類との何気ない会話にも、世間からの疎外感を感じるものです。

私はその後高校へ異動しましたが、25年ののち、校長として再び特別支援学校に着任しました。この間に特別支援教育は大きく進歩していたものの、お母さん方の悩みと歩みは、25年前と同じでした。ですから、引用文を読むと、当時出会った一人ひとりが思い起こされ、込み上げる思いを抑えきれなくなってしまう。

夏目漱石は、小説『草枕』の書き出しで、こう記しています。

**「智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。とかくに人の世は住みにくい」**

世間というのは、障害のあるなしに関わらず、冷たく無関心で、仮に共感してくれてもすぐ無関心になってしまいます。そのために心が折れ、心を閉ざし、逃避したり引きこもってしまったり、とまではいかなくとも、「〇〇ちゃんが〇〇って言ってたよ」とかいうように、自分の発言や振る舞いが誤解されたり、無頓着に拡散されたりといった経験は、誰にでもある。特に最近、それが許せず、その後の在り方生き方に良くない影響を受ける人が多いようです。

世間といかに上手に折り合いをつけるかは、青年期から10年20年続く、人生の大きなテーマです。さあ諸君、どう折り合いをつけましょうか。

マザー・テレサは、次のような言葉を残しています。

人は不合理、非論理、利己的です 気にすることなく、人を愛しなさい あなたが善を行うと、利己的な目的でそれをし たといわれるでしょう 気にすることなく、善を行いなさい 目的を達しようとするとき、邪魔立てする人に出会 うでしょう 気にすることなく、やり遂げなさい あなたの正直さと誠実さが、あなたを傷つけるで しょう 気にすることなく正直で誠実であり続けなさい	あなたが作り上げたものが、壊されるでしょう 気にすることなく、作り続けなさい あなたの中の最良のものをこの世界に与えなさい たとえそれが十分でなくても 気にすることなく、最良のものをこの世界に与え続 けなさい 最後に振り返ると、あなたにもわかるはず 結局は、すべてあなたと内なる神との間のことなの です あなたと他の人の間であったことは、一度もなかつ たのです マザー・テレサ
--	---

マザー・テレサの言わんとする真意を受け止められるでしょうか。

エリック・バーンは交流分析を提唱した精神科医です。交流分析は、なまかじりですが、世間と折り合いをつけるために、また精神衛生を保つために役立つツールなので、諸君にもお勧めですが、そのエリック・バーンは「過去と他人は変えられない。変えられるのは未来と自分である」と言いました。マザー・テレサの「結局はすべて、あなたとあなたの内なる神との間のことです」とも通ずる主張ですよ。

つまり、世間を相手に怒ったり争ったりするさまは、ドン・キホーテが風車に向かって突撃する滑稽さと同じだということ。世間とは、対峙・対決する対象ではありません。上手に折り合いをつけるのが良い。そして、真に対峙すべきは、我々の内なる神、すなわちよりよく生きようとしてあがき続ける良心なのだと思に至ります。世間が承認してくれなくても、称賛してくれなくてもへこたれることはないのです。

漱石は、文壇デビューして間もない、若き芥川龍之介に宛てた手紙に、次のようにしたためています。

牛になることはどうしても必要です。吾々はとかく馬になりたがるが、牛にはなかなか切れないです。あせっては不可ません。頭を悪くしては不可ません。根気づくでお出でなさい。世の中は根気の前に頭を下げることを知っていますが、火花の前には一瞬の記憶しか与えて呉れません。うんうん死ぬ迄押すのです。それ丈です。決して相手を拵えてそれを押しちゃ不可ません。相手はいくらでも後から後からと出てきます。さうして吾々を悩ませます。牛は超然として押しに行くのです。何を押しかと聞くら申します。人間を押しのです。文士を押しするではありません。	夏目漱石が芥川龍之介、久米正雄に宛てた書簡
--	-----------------------

結びに、新年の滑り出しにあたって、世間を恨み、うまくいかないことを世間のせいにして日々暮らすことなく、先人の知恵を励みにして自己内対話を重ねながら、自らの信ずる道を歩んでください。それができれば、ふと見上げる茜色の夕焼けに感動できるはず。日々の営みの中に、大自然の神々しさを発見し、諸君を祝福する大いなる力が、確かに存在すると感じることで令和6年になるはず。